『樂邦文類』の浄土思想史的意義

柴 田 泰

はじめに

一九八八年、日本では全く新しい浄土教が誕生したほぼ同じ時代、一二〇〇年に中国では中国浄土教の特徴を端的に示す豊富な資料が編集された。前者が法然『選択集』、後者が宗曉『樂邦文類』である。その後、法然を宗祖とする浄土宗、その弟子親鸞の浄土真宗が日本浄土教の主流として発展し、今日に至っていることは、あまりにも有名である。一方、『樂邦文類』もそれまでの中国浄土教の特徴を顕著に示し、その後の中国浄土教に大きな影響を与えたが、しかし、本書の価値はそれほど評価されていない。ところが、中国浄土思想の諸問題を考究するとき、その多くは本書に至り、更に本書を起点として、その後発展するのである。

本稿では、中国浄土教における唯一の資料集成『樂邦文類』の思想が浄土思想史の上でどのような意義・価値を持つかを考えよう。

一 『樂邦文類』の概要と従来の見解

本書の編者宗曉(一一五二—一二二四)の交友関係から、宋代浄土教の様相を論究された野上俊靜博士は、

『樂邦文類』五卷は、親鸞の『教行信証』に影響をあたえているところから、真宗関係の学徒に、はやくから注目されているが、その全体的研究は、ほとんどなされていない。……その全体的な解説は、わずかに、『国訳一切経』諸宗部七にみえる『樂邦文類』に附された林五邦氏の解題だけであろう。

と言われる。この事情は現在まで変わっていない。

そこでまず、本書の構成・内容などの概要と林五邦氏の評価を要出して、本稿の意図を明らかにしよう。

『樂邦文類』五卷は、天台僧宗曉が数年をかけて資料蒐集に奔走し、慶元六年(一二〇〇)に完成している。その構成は経論以下詩詞に至る十四科二四八文類の集成で、内容は廬山慧遠の宗風を再現しようとして、主に廬山・天台浄土教に

関する文書を収録している。後世の影響としては、中国では『仏祖統紀』『往生集』、日本では親鸞『教行信証』など十数部に引用され、その影響は大なるものがある。更に本書は、すでに散逸した多数の資料が認められ、宋代浄土教、とくに居士仏教についての重要な典籍であることなどが知らされてくる。

以上の諸点は、そのまゝ浄土思想史の上での本書の意義としても高く評価すべきである。

ところで、『楽邦文類解題』では、以上の諸点を指摘しながら、その中で本書の欠点として、次のような見解を述べている。

。然らば一体楽邦文類は、支那に於ける浄土教の史籍の中で、如何なる地位を占めるものであるかといふに……、たとひ支那浄土教史研究の第一資料たることは出来ないにしても、その取扱ひ方如何によつては、最も有力な傍証となる……。

。本書は単なる文の抄出転載のみでなく、屢々引文の後に批評を加へてゐる。……然しもとよりこは単に批評を加へた文の引用であるから、それ程重要視する価値は少ない……。

。(本書の内容は)、著しく思想的に貧しいものであり……。即ちその文は多く生即無生、唯心の弥陀、己心の浄土に就いて反覆してゐるものであつて、徒らに論を重ねて少しも深まることがない。

『楽邦文類』の浄土思想史的意義(柴田)

このような多少酷しい評価が、これまで多くの研究者が部分的には言及しても、全体的な研究がなされなかつた大きな理由と思われる。

そこで本稿では、本書は中国浄土思想全体の特徴を顕著に示し、その幾つかの資料は第一資料たりうることを、宗暁の批評を重視すべきであること、中国における主要な浄土観、唯心浄土思想を確立した書であることを、浄土経論の査定、中国浄土教の系譜、唯心浄土思想の確立の三点を挙げて論証しよう。

二 浄土経論の査定

まず第一は、本書は中国において浄土経論が何かを査定した唯一の書という点である。日本では、法然の『三経一論』が有名であるが、インド・中国ではそれがはっきりしていない。

宗暁は本書第一巻で「大蔵專談浄土経論目錄」として十六部、続いて「経凡四十六処」「呪凡二十道」「論凡六処」の要文を挙げ、その幾つかに諸師の解釈・自らの批評を附記して、査定の理由を明らかにしている。われわれは、その附註によつて、誰れがその経論を浄土思想と考へたのか、その経論の解釈がどう変つていったかなどを知ることができる。諸師の解釈・宗暁の批評を重視すべきというのはこの理由による。

そこで、宗暁が査定した浄土経論の主な特徴を挙げると、

第一に、その部数は四〇部であり、しかも、それらに同等の価値を置いている。もとより、その中でも「浄土三部経」の要文が最も多いが、日本のようにそのみを正依としていない点に特徴がある。第二に、呪「陀羅尼」が一〇部認められる。中でも『浄土神呪』が『阿弥陀経』の後に読誦される形式は、敦煌写本から今日の中国仏教圏でも行われる中国の代表的仏教儀礼である。第三に、われわれには浄土経論とは阿弥陀仏・極楽について説くという前提があるが、宗暁の査定には全く阿弥陀仏・楽楽を説かない經典が認められる。『文殊般若経』『大集経日藏分』などであるが、宗暁は夫々に智顛・堪然・遵式の解釈を附記して、浄土經典と査定する。第四に、これらの中に疑経・古佚経が認められる。かつて偽物と排斥された疑経は、今日ではむしろそれを創作した時代社会の実態を端的に示すものと評価されるが、それゆえ中国浄土教においても、その隠された一面を語るものと言えよう。

以上の特徴を浄土思想史に重ね合わせると、インドとも日本とも異なる中国独自の諸相が知られる。インド浄土思想の研究は、原始浄土思想、龍樹・天親（世親）などの浄土思想を除いて、未だ解明されていない分野は多いが、その基礎的資料は阿弥陀仏・極楽に言及する梵藏本、漢訳経論二九〇部であろうし、日本では「三経一論」が正依であるから、阿弥陀

仏・極楽に言及しない、浄土思想と解釈「会通」された經典・疑経・古佚経などは中国独自の浄土経論である。

更に、宗暁の査定を中国に限ってみると、これらの特徴はそのまゝ浄土思想史全体の特徴であることが知られる。宗暁は、これらの浄土経論を恣意的に査定したのでなく、それまでの歴史の中で誰れかが浄土経論と解釈した要文を挙げ、かつ、その幾つかに解釈も添えた。従って、宗暁の査定した浄土経論はそのまゝ中国浄土思想史における重要な浄土経論なのである。

三 中国浄土教の系譜

第二に、本書は中国浄土教の系譜を最初に主張したという点である。

宗暁は、本書第三巻で、

蓮社始祖廬山遠法師伝
蓮社繼祖五大法師伝

蓮社之立、既以遠公為始祖。自師歸寂、抵今大宋慶元五年己未（一一九九年）、凡八百九年矣。中間繼此道者乃有五師。一曰善導師、二曰法照師、三曰少康師、四曰省常師、五曰宗贖師。

と主張する。

われわれが中国浄土思想を歴史的発展とみて迎ろうとする、幾つかの細かい流れはあっても、諸宗のような師資

相承の太く長い共通の思想がない点で困惑する。中国浄土思想の特徴は多様性にある。この多様性・異質性を鋭く見抜き、主要な思想を大胆に分折したのが、法然の慧遠流・慈愍流・善導流、所謂「浄土三流」であり、善導流の「浄土五祖」である。この査定は、思想的だけでなく、地理的年代的にも、中国浄土教の歴史と相応するものと後に立証され、高く評価されている。それに対して、宗暁の査定は、善導を以て慧遠流の第二祖となしていることは、甚だ解し難いことと批判、あるいは無視されていたのが、これまでの見解と思われる。

この点については、すでに別な機会に詳論したので、その要点を指摘するにとどめよう。まず、法然の「浄土三流」は、慧遠・慈愍・道綽善導、夫々の思想的異質性不同性（「諸家不同」）を指摘したのであり、「浄土五祖」はその中の善導流の正統性を最も権威ある『高僧伝』だけを根拠に立証したのである。この点で、法然の思想的読みの深さと資料の厳正さには卓越したものがあり、中国人にはなしえなかった創見である。このことは高く評価すべきである。しかし、法然の査定は中国浄土教全体の流れの中で、系譜を意図したものでない点が明らかに宗暁と異なっている。

一方、宗暁の査定は、それまでの多様な浄土思想をとまかく一つの系譜で繋ぐことを意図したところに大きな特徴があ

り、廬山慧遠流の再興という起点から、般舟三昧行法という共通の線で、善導・善導の後身法照・後善導の少康と主張した。従って、法然・宗暁の見解は夫々目的意図・根拠の資料が全く異なるのであり、これまで、同時代であるがゆえに、安易に比較しようとしたところに誤解があったように思われる。宗暁の査定は、それまでの浄土教を共通する思想で繋ぐうとした点で、浄土思想史の上で高く評価すべきである。なお、その後の中国では、宗暁の査定から志盤の蓮社七祖説、更に第八祖・九祖・十祖から第十三祖と加えられ、近代に至っている。よって、後の影響が如何に大きかったか知られよう。

四 唯心浄土思想の確立

第三に、思想的に最も重要な点は、本書は中国浄土思想史の上で主流の浄土観、唯心浄土思想について、実に豊富な資料を提供し確立させた点である。

唯心浄土思想は、これまで善導の指方立相論の立場から批判され、従って、日本ではあまり評価されていなかったように思われる。しかし、中国浄土思想史全体の中では、善導の指方立相論よりもはるかに大勢を占め、永い歴史を持つ思想である。この思想は、中国において初めて成立した思想で、その最初の提唱者は永明延寿（九〇四―九七五）とされてい

る。それゆえ、延寿などの個々の研究はあっても、その総合的成果はなされていない。

ところが、本書には、唯心浄土思想・その先行資料などが豊富に認められる。それらを年代的に整理し、歴史的に辿ると、以下の諸点が明らかにになる。

まず、唯心浄土思想の典拠・源流としての経論は、『維摩経』の「心浄土浄説」、『華嚴経』の〈唯心偈〉、『観経』の「是心是仏」などの経文であり、本来は諸仏の唯心・諸仏浄土の唯心であった。従って、インド・弥陀浄土教には全く認められない思想である。

中国に入ると、多くの諸師は諸仏浄土を分析し、「法性土・常寂光土」を最高とし、弥陀浄土を「応土・凡聖同居土」と低く考えた。それに対して、善導が諸師の見解を「古今楷定」²³⁾して、報土説を確立したことは有名である。しかし、中国仏教全体の流れの中では、善導に楷定された諸師の浄土観が大勢を占めており、やがて、弥陀浄土教とりわけ天台浄土教が盛んになると、本来、諸仏浄土の唯心が弥陀浄土の唯心と転写され、五代・宋代に明確な体系へと変貌する。

本書には、唯心浄土思想の典拠となった経論、その後の天台・華嚴・禅系などの浄土観の変遷、夫々の主張の理由、唯心浄土と西方浄土の会通と対立などが豊富な資料から読み取れる。

このように、唯心浄土思想は中国仏教全体の中で発酵し、宋代に確立する一大思想である。ここでは紙数の関係で、本書がこの思想の一つの帰着点であり、かつ、その後展開する出発点の意義を持つことを指摘するにとどめる。

おわりに

以上、『楽邦文類』の諸相の中から、浄土経論の査定、中国浄土教の系譜、唯心浄土思想の確立の三点について、浄土思想史の上でどのような意義を持つかを考えた。本書を日本浄土教の立場で、あるいは、たゞの資料集と読むなら、前の解題で酷評された評価にもなるが、宗暎は膨大な数量の関係資料の中から、苦心惨憺して楽邦の文類を抄出したのであり、夫々を歴史の上に配置し、従来の研究を加味すると、そのまゝが中国浄土思想史になると思われる。

中国浄土教の特徴は、思想的にも形態的にも、多様性にある。その多種多様な細い線と点を一本の太い線で繋ぐと意図し、しかも、インドとも日本とも異なる中国浄土思想の様相を顕著に示したのが本書である。個々の浄土思想を取り上げると、善導をはじめ秀れた思想家は多い。しかし、これだけ多くの文類を提供し、中国浄土思想全体の特徴を示したものは外に無いであろう。

1 本稿で用いる「浄土思想」の概念は、字義どおり、浄土に関

する思想・教義・教理を意味し、「浄土教」という場合は浄土思想を含めた実践・信仰などの広義の形態を意味する。

2 野上俊静『楽邦文類』の序について『中国浄土教史論』一二頁。

3 林五邦『楽邦文類解題』『国訳一切経』諸宗部七、一一一八頁。

4 『楽邦文類序』汪大猷、「西資社同誓文」師友の細註、「後序」善月（大正四七・一四九上・一七九中、二二九上）。なお、本書撰集の四年後、その他の遺文を集録して、『楽邦遺稿』二巻が撰集されたが、本稿では取上げない。

5 『楽邦文類』の組織と引用数

巻一、経 四五、呪 一〇、論 六。

巻二、序跋三二、文 一三、讚一七。

巻三、記碑一九、伝 一四。

巻四、雜文三四。

巻五、賦銘 三、偈 六、頌二〇、詩二二、詞 七。

6 林五邦、前掲解題、七、八、一三頁。

7 この点は、中国において浄土経論を査定する資料、たとえば『浄土論』巻中（十二経七論 大正四七・九二下―九七上）、『釈浄土群疑論』巻七（念仏証拠章 大正四七・七三中）などと較べれば、容易に納得されよう。

8 法然『選択集』（『浄土宗全書』巻七、五一―六頁）。

9 大正四七・一四九下―一六五上。

10 主な經典の引用数は『無量寿経』一〇処、『觀無量寿経』六処、『阿弥陀経』三処、『華嚴経』三処、『法華経』二処、『首楞嚴経』二処である。

11 井ノ口泰淳「敦煌本『阿弥陀経』について」『宗教研究』第一七七号、鎌田茂雄「中国の仏教儀礼」一七、四四七―四四九頁。

12 『文殊般若経』『大集日藏経』『首楞嚴経』『守護国界主経』（大正四七・一五七下、一六〇上中、一六一上中）。とくに『文

『楽邦文類』の浄土思想史的意義（柴田）

殊般若経』の「一行三昧、専称仏名」（大正八・七三一―中）の経説は、道綽の念仏三昧（『安楽集』巻下、大正四七・一四下）、善導の無観称名（『往生礼讃』大正四七・四三九上中）などの引証で重要である。

13 「随願往生経」「十往生経」「目連所問経」「善信摩親経」など（大正四七・一六〇上―一六一上）。拙稿「浄土教関係疑經典の研究（一）」「札幌大谷短期大学紀要」第八号、一〇三―一〇五頁。

14 藤田安達「原始浄土思想の研究」一三六―一六四頁。

15 大正四七・一九二中―一九三下。

16 「浄土宗亦有血脈。但於浄土一家、諸家不同。所謂廬山慧遠法師・慈愍三藏・道綽善導等是也。今且依道綽善導之一家、論師資相承血脈者、此亦有兩説。……、二者菩提流支三藏・曇鸞法師・道綽禪師・善導禪師・懷感法師・少康法師宋高僧傳」『選択集』（『浄土宗全書』巻七、八頁）。なお、「逆修説法」「類聚浄土五祖伝」「浄語燈録」（『浄土宗全書』巻九、三八六、四一四、四一八―四三一頁）参照。

17 道端良秀「中国浄土教の時代区分と地理的考察」『中国浄土教史の研究』、小笠原宜秀「中国浄土教家の研究」一二四―一三二頁。

18 拙稿「中国浄土教の系譜」『印度哲学仏教学』第一号。

19 従って、〈浄土三流〉を名実ともに兼備し、『善導の後身』とまで称された法照すらも、『宋高僧伝』巻二、「法照伝」（大正五〇・八四四上―八四五上）には善導との関係が認められないので、列祖としていない。

20 中国浄土思想史からみて、宗暁の査定の難点は、そこに天台浄土教の諸師が含まれていないことである。中国において、天台浄土教は質量ともに最も大きな分野である。宗暁は自ら天台僧ゆえに、浄土教に大きな功績と影響を残した天台諸師（智顛・遵式・知礼など）に最大の敬意を示しながらも、系譜には含

『楽邦文類』の浄土思想的意義(柴田)

めない。天台諸師をこの系譜を加えると、最も太い確かな浄土思想史になるであろう。山口光円『天台浄土教史』一〇五—一〇九頁参照。

21 蓮宗十三祖説は「慧遠・善導・承遠・法照・少康・延寿・省常・株宏・智旭・行策・実賢・際醒・聖量(印光)」(鎌田茂雄、前掲書、四六〇、四八一、六三四、六三八—六四〇頁など)である。小笠原宣秀『中国近世浄土教史の研究』一七九—一八五頁、牧田諦亮『善導大師と中国浄土教』『中国仏教史研究』第二、三五〇—三六七頁。

22 主な資料としては、二万善同帰集揀示西方「延寿」、「復楊文公請住世書」知礼、「唯心浄土説」道深、「唯心浄土文」守訥など、四十数部に認められるが、ここではすべてを指摘するゆとりはない。

23 拙稿「指方立相論と唯心浄土論の典拠」藤田宏達博士
選歴記念論集 インド哲学と仏教」(予定)。

24 たとえば、望月信亨『中国浄土教理史』九〇—九九、一〇七—一一一、一一五—一二二頁など、同『浄土教の起源及発達』七六一—七六二頁、神子上恵龍「弥陀身土思想展開史論」三一—四頁以下。

25 善導『観経疏』卷一、四(大正三七・二五〇中—二五二上、二七八中)

26 拙稿「中国浄土教における唯心浄土説」『宗教研究』第二五九号。

27 筆者は唯心浄土思想の総合的研究を意図しており(前掲論文、他に「永明延寿の唯心浄土説」『印仏研』第三二卷第二号)、詳細は別に発表予定である。

△キーワード▽ 『楽邦文類』、浄土経論、中国浄土教の系譜、唯心浄土思想。

(昭和63年度文部省科学研究費一般研究による研究成果の一部)

(札幌大谷短期大学教授)

会員資格に関する内規

一、会員は原則として新制大学又は短期大学卒業以上、あるいはそれに相当する学力を有する者とする。入会に当っては学会役員(理事又は評議員)一名の推薦を得た上、理事会の承認を必要とする。

二、学術大会における発表資格者は、原則として新制大学院修士課程修了以上、又はそれに相当する学力を有する者とする。

三、会費を三第間滞納した者は退会したものと認める。又、会の名誉を著しく害なう等会員として不相当と認められる者については、理事会の決定により除名することができらる。